

# 「どの作曲家にも惚れ抜いた」

バロックを起点に現代音楽まで、ピアノ音楽の歴史を独自の視点でたどるシリーズ「ピアノ大全集」を3年がかりで続けてきたピアニストの田崎悦子。22日、東京・上野の東京文化会館で開く6回目のリサイタルが、その締めくくりとなる。「音楽家は生涯黑衣。作品に命を与えるために生きている」。そんな原点を胸に刻み直す「旅」だったと振り返る。(吉田純子)

シリーズは06年10月にスタート。「バロックから古典へ」「古典からドイツロマンへ」などと時代ごとにテーマを決め、芯の強さをにじませるタッチで様々な作曲家の個性を掘り起こしてきた。

## 22日のリサイタルで締めくくり

「どの作曲家にも惚れ抜いた。惚れただけにもなったけど、『片思い』で終わった作曲家はなかったかな」

最終回のタイトルは「20世紀から21世紀へ……そして再びJ・S・バッハへ」。メシアン、バルトーク、ガーシュイン、池辺晋一郎と、様々な20世紀音楽をとりあける。ロックパークの「パルティータ・ヴァリエイションズ」は、76年に米ケネディ・センターで田崎自身が初演した曲だ。

最後に弾くのはバッハの「パルティータ第4番」。本シリーズの初回に弾いた曲をもう一度奏で、大きな円環を閉じたかったという。勝利のファンファーレを思わせる冒

頭のプレリュードを奏でるたび「ああ、ここに戻ってきた」と実感する。そしてまた、ここからピアニストとしての新たな一歩が始まるのだ、とも。

79年、シカゴ交響楽団常任指揮者のショルティに才能を見いだされた。その後は長く米国に暮らし、ゼルキンやカザルスの薫陶を得る機会にも恵まれた。帰国後は

八ヶ岳に居を構えている。02年からは合宿形式のレッスンを始めた。ゼルキンの言葉に背中を押されたという。「日本のピアニストは、才能があってもあっさりやめてしまうことが多い。音楽はスポーツじゃなく、生涯を通じて作曲家と対話する仕事なのに」

生徒たちはオーディションで選ぶ。定員は12人。一人一人に丁寧な目が届くように、との思いからだ。農業や料理も生徒たちにさせる。ピザを焼いたり、ポテトサラダを作ったり。十分に火が通っていない「失敗作」でも、自然の食

物は十分に味わい深い。もうひとつ、競争心を捨てさせることもこの合宿の眼目だ。他の参加者の音楽に耳を傾け、それぞれの音楽を尊重し、互いに応援しあう心を持ってほしいと語る。

「音楽作品は、作曲家が音符で書き留めた日記のようなもの。そんな気持ちで、日々譜面に向き合うことが、音楽家として充実した人生を送ることにつながると思うから」

午後7時、5千円、学生3500円。電話03・32335・3777(コンサートイマジン)。



「芸術家は何でも屋になっちゃいけない」と自分にも生徒にも戒めるという田崎悦子